

『海紅』（山崎聰第一句集）より

立春や峠を越えるとき転ぶ  
雪の山空近ければこえを出す  
ときには雪の朝のいろいろ別れゆく  
岬への道風花に人流れ  
山かたむく紅梅くらきところにて  
山で逢い梟の貌をして別る  
中年やぬくもりて陽をまぶしめる  
春の邪気めつむりてまたみひらきて  
あたたまり鴉・茅花と水の村  
崖下の二戸ほどが濡れももさくら

松村五月 抄出